
東方空気録 ~ Air Man

空燐文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方空気録 ～Air Man

【Nコード】

N1845T

【作者名】

空燐文

【あらすじ】

一般的、というのは空気と同義である……。彼にどんな意思があるかと、何を思おうと、彼女らには関係のない、話。

プロローグ

それを偶然と言うなら、偶然だったのだろう。

ただ偶然に其の日のバイトで疲れ切り、足取りがふらついていて

偶然にも疲れて休憩しようとした場所が川で

偶然にも寄りかかったフェンスが錆びついたものだったというだけだ。

だけれど、そんな偶然が重なれば、それは一種の奇跡、と呼んでもいいんじゃないだろうか？

そんな、私の、ひとつの奇跡。

「……………どっだっっ。」

大の字に転がる私の、目に、キツイ太陽光が突き刺さる。
目を開けた私は、その異様な光景に目を疑った。

周りを見渡せば、森。

現在都会では絶滅寸前のような、そんな光景。

電灯すら見当たらない不可思議極まりない光景。

おかしい、と心で思う。

自分は、なぜこんなところにいる？と思い、記憶をフラッシュユバツクさせる。

確か、疲れた体でバイトを終わり、休憩のためにたばこを吸おうとして、フェンスに寄りかかって、そして

「……………落ちた？」

落下時にある浮遊感。

それを思い出し、一瞬体が震えた。

下は川。都会の川の底の浅さなぞ、たかが知れている。頭でも打つてしかるべきである。そしてこの森の風景。考えられることは二つ。

「……死んだか、夢か。」

温かみのある太陽光は夢の物とも思えない。ではここは死後の世界だ、とでもいうのだろうか。

想像していた天国というものはまるで違った印象に、私は肩を落とす。

天国とは、楽園のような場所である、と聞いていたのだが、これではただの森だ……と考えて、ああ、なるほど、と理解する。天国とは楽園ではなく、天にある国なのか、と。

とりあえず身の周りの物を確認する。

ポケットには財布。紙幣が三枚ほど入っている貧相な中身。

ガスが半分しか残っていないライター。

まだ開けていないライター。

以上。

あまりにも貧相な持ち物たちだった。

天国なら、もう少しまともな物を持たせてほしい……と思いながら、私は立ちあがる。

立ちあがると同時に襲ってくる疲労感。それは自分が生前間近まで感じていた疲労感。

「……生きている？」

体を見降ろすと、濡れた個所などはどこにもなく、傷もなかった。川に落ちたのであれば濡れていてしかるべきなのだが、それすらな

い。では、自分は生きているのかいないのか？

考えても仕方がない、と自分に区切りをつけて、封を切っていないかったタバコの封を開ける。

落ちる直前まで吸っていたたばこは、何故かポケットのなかには入っていないかった。

一本を取り出し、火をつける。口に啜えて煙を吸うと、いつもの感覚が戻ってきた。嫌悪感のような、何かが満ちて行くような、そんな感覚。

「さて、と。」

ここが天国なのか地獄なのかは関係ない。とりあえず動かなければ始まらない、と私は搜索を始める。

「……………げほっ。」

タバコを吸ったのがよくなかったのだろうか。歩けば歩くほど眩暈が強くなっていく。

視界が歪む、という言葉があるが、それを現実に体験する羽目になるとは思いもしなかった。

さらに、進めば進むほど悪化する視界の御蔭でろくに前も見えていない。

霧、なのだろうか？

それとも、別の何か？

全く想像もつかないものに纏わりつかれる感覚。悪夢だ。

事故死した挙句、死後の世界でもう一度死ぬようなはめに会うなんて、そうそう出来た経験ではない。ある意味貴重。

誰がそんな体験をしたいかは、全く分からない、が。

「……………ん。」

そんな自分の霞んだ視線の先に、見える一軒の家。

この森にふさわしいような、洋風の家だった。

希望はここにあったのか、と私はふらふらとその家に近寄る。

其の家が幻影であろうと構わない。とりあえず休めそうな場所があるならそれで満足だ。

差し詰め、御菓子の家を見つけたヘンゼルとグレーテルか。

近くまで来ると、その家の実体を感じられた。幻影ではない、とい

う感覚に私の心は躍りあがる。家があると言うことは誰かが住んでいるということだ。

鬼婆だろうとなんであろうと構わないが、このまま眩暈で倒れることだけは御免だった。

そうしてその家のドアをノックしようとした時、奇妙な物が目に入る。

それは屋根の上に乗っていて、一見するとよく見る物。女性が好みそうな可愛らしい人形だった。

だが、身間違いだろうか？その人形が、今、動いたような感じがしたのだ。

「……………まさか、ね。」

夢物語ならいざ知らず……………と思ったが、考えてみればこれは夢物語なのかもしれない、と気付いた。

死後の世界と言う名の夢物語ならば、そんなことがあっても不思議ではないだろう、と。

ゆっくりとドアを叩こうとした、其の時であった。

グラッと、足が揺れる。

限界だ、と言わんばかりに意識が飛び去っていく。

「……………っ。」

強固な感覚に、私は意識を手放した。

最後に見たのは、ちいさな人形が、屋根から飛び降りるその姿。

（ああ、なるほど。死神と言うわけか。）

そんなお伽噺も悪くないね、と一人、呟いた。

「あら、上海どうしたの……?」
「シャンハイ!」

外で見張りをしていた上海が、何か慌てた様子で家の中に入ってきた。魔理沙が来た、というわけでもなさそうである。

あの白黒泥棒が来たとあれば、全人形に迎撃態勢を取らせるように指示してあるからだ。

勿論、容赦も情も全く無しに。

ワイヤーから感じられる上海の感情は焦り、というのか。

とりあえず外に出る、という意識の欠片。

私は不審げに思いながらも、作り続けていた『大型絡繰人形』の制作を中断し、外に出てみる。

ドアを開けようとして押してみると、何故かドアは動かなかった。

外に何か置いてあつて出れないような、そんな感触。

一体何かしら、と思いながら力強く押すと、ずるずるという音とともにドアが開いた。

「……………あら。」

外には、一人の男性が倒れていた。

見たこともないような、服装の。

「……………なるほどねえ。可哀そうな漂流者さんだったみたい。…

…ま、ここで死なれても味気悪いし、運んであげますか。」

こうして、私は幻想郷に迷い込んだ。

偶然に偶然が重なったような奇跡の確率。

それが、いいことなのか悪いことなのかは、全く分からない。

ブログ（後書き）

ブログ的なものです。気まぐれに更新していきますので、速度はまちまちです。

一話目（前書き）

幻想入りした話を書くのは久しぶりです

一話目

夢をみた

過去の記憶を蘇らせる記憶。

『ああ、君は一体何を言っているんだい？』

目の前の白衣を着た医者は、困惑した表情で私を見つめる。

自分は事実を言っているだけだというのに、全く信じてもらえない。

其の事実は、幼い自分の心に、大きく深く、傷跡を残して行った。

「……………どういうことだ。これは。」

確か、謎の脱力感とともに倒れたところまでは記憶している。だが、それが一体どうしてこうなっているのだろうか。

いつの間にか周りを人形に囲まれている部屋のソファ―に眠っていた。

その人形ひとつひとつが違う形を模していて、そうであっても不気味な光景だった。

これほどまでに生きていない物に見つめられる、というのはどんな気分なのか。

その大量の人形の中に、先ほどみた人形はいなかった。

「……………これを天国と呼んでいいものか。」

死後の世界なのか否なのか。

感覚的には生きているのだが、見渡す風景はどうにも幻想的で、想像している死後の世界のよう。

私は掛かっていた毛布を丁寧に畳み、立ちあがる。

毛布が掛けられていたということは、やはり誰か人間がいるのだろうか。

無闇に歩き回るわけにもいかず、立ちあがったまではいいが手持無沙汰でやることがない。

大抵こういうときは、タバコを吸うと落ちつくのだが、見知らぬ他人の家で、いきなりタバコを吸い始めるほど礼儀のない人間ではな

い、と自負している。

仕方が無いので軽く歩きまわり、人形を見て回る。

どれも精巧な人形たちで、髪の毛などは本物のようだ。中には武器を持つている人形などもいて、観察し始めるとなかなか面白いものだった。

しかし、そのすべてが女性を象っている、というのは少々不可思議だったが。

そうやって見て回っていることに集中していたためか、ドアが開いた音にすら気がつかなかったようである。

「……………好奇心旺盛なのね、貴方。まるで魔理沙を見てみたい。」

「……………!?!」

後ろからいきなり声がかかったので、驚いて振り向いた。

ドアのところに女性が一人立っている。西欧風の洋服に金色の髪の毛。色白の顔。

まるでこの人形たちの一体を、そのまま大きくしたような人間がそこに立っていた。不気味、と言えば不気味だが、それよりもその美しさや可愛らしさ、のほろが先に立つ。

そんな彼女の傍らには、みたような表情の者がいた。

「あ、君は…………。先ほど振り、かな?」

「…………私の記憶が正しければ、私とあなたは初対面のはずだけれど?」

「ああ、違う違う。君ではなくて隣の…………人形が、浮いてる?」

「…………あら、珍しいかしら。」

その女性は、浮いている人形の髪の毛を撫でる。すると、驚いたことに照れくさそうな表情を浮かべているではないか。この人形には感情が備わっているともいえるのだろうか。

……果たしてそれを人形と言っているのかすら疑問である。感情を持った人形、すなわち人間と言ってもいいのではないだろうか？
所詮我等人間と言う個体も、感情を持った入れ物にしかすぎないのだから。

しばらくその人形を見つめていると、こちらの視線が気になるのか少女の後ろに隠れてしまった。背中からちょこつと首を出しながら見る姿は、なんだか可愛らしかった。

長いことその人形の様子を観察していたからだろうか。その持ち主が咳払いしたことで、ようやく私は現実に戻ってきた。

「……ま、関心を持ってくれるのは嬉しいのだけれど、そろそろ自己紹介をしたりしてもらったり、なんていかがかしら？」

「……まあ、そうですね。というよりも、ここがどこだか僕にはわからないのだけれども。」

「……ああ、なるほど……。大体把握。とりあえず、名前を教えてくださいませんか？」

「名前……。贅奈 鏡夜、です。にえな、きょうや。」

我ながら変な名前だな、と思うが親が名付けたのだ。致し方あるまい。名前と言うのは人生を決めるための呪詛、だと言う人もいるがどうなのだろうか。

目の前の少女はふうん、と一言頷いたあと、素敵な名前ね、と一言

置いてから、

「私はアリス。アリス・マーガトロイド。」

「……だいぶ洋風な名前だね。」

「そう？ 普通な名前だとおもうけれど。あ、ちなみに後ろの子は上海。」

「……だ、だいぶ日本的な名前だね……。」

西洋風な名前に日本風な名前、とこれほど不思議な組み合わせもない気がするのだが。

アリス、と名乗った少女は私に座って、とイスとテーブルを指差し、自分はその対面側に座った。

私は素直にその指示に従い、指示された椅子に座る。

「あ、上海は御茶お願いね。……さて贄奈君だっけ？」

「贄奈でどうぞ。君付けで呼ばれるほど上等な人間じゃないんで。」

「じゃあ贄奈。分かっているかもしれないけど、おそらく今いる場所は貴方の住んでいた場所とは違う場所だわ。」

「……まあ、そうだろうね。」

私の生きてきた日本で、空中に浮く感情をもった人形が出来た、なんて話を聞いたことはないし、そもそもここが生の世界なのか死の世界なのかもわからない。

ただ、わかることは、現実離れしている、ということだけ。アリスの話は続く。

「細かく言うと、ここは幻想郷。幻想が現実になっている場所。貴方の住んでいたところとは、おそらく表裏一体の場所よ。」

「なるほど、天国でもなければ、地獄でもない、か。」

「……なんでそんな発想が出てくるのかしら。」

「……人形に囲まれて目覚める天国や、森で倒れる地獄を味わったから、かな。」

少なくとも、命があるということは分かった。考えてみれば、肉体も何もない死後の世界で、苦痛を感じる、と言うこと自体が矛盾している。眩暈を感じる、という時点で自分の生は確定していたのだ。

そこまで話終わったところで、先ほどの人形、上海が重そうに御盆を運んでくる。

ふらふらと飛んでくる姿は非常に危なっかしかったが、すぐにアリスが御盆を取り上げたので惨事には至らなかった。

ゆっくりとカップに紅茶を注ぎ、アリスは私にどうぞ、と渡してきた。

中身は紅茶。個人的には緑茶のほうが好きなのだが、出してもらった以上、文句は言えない。

いただきます、と一言断り、私は少し啜る。苦いような甘いような、不思議な味。

そんな評価が顔に出ていたのだろうか、アリスはクスツと笑い

「……紅茶は苦手かしら？」

と聞いてくる。

「苦手ではないが、好きでもない。そう言う感じかな。」

「魔理沙みたいねえ。あと霊夢。」

「……知らない人間に例えられると困惑するのは例えられた方だ、と思うけど。」

「そうね。でも私も貴方の知っている人は知らない。例えようがないでしょう？」

「……それも、そつだ。」

どうにもこの味は好きになれない、と思いながらも飲み続けると、上海が小さな皿を携えて、こちら側に飛んできた。皿にのっているのは小さなクッキーが三枚ほど。

「……いただいて、いいのかな？」

そう言うと、上海は小さく頷く。私は御皿ごと上海の手からクッキーを取り、一枚食べる。一枚食べて分かった。

「ああ、なるほど。」

「ん？」

「クッキーとこの紅茶は、二つで一つつて、わけか。」

少し甘過ぎるくらいの甘さ。これを紅茶を啜りながら食べれば合う。日本の茶の文化と同じだ。いや、どちらが先か、と問われたら恐らく向こうのほうが先なのだろうが。

私はありがとう、という意味をこめて上海の頭を撫でてみる。

さらさらという感触を持つ上海の髪の毛は、人間と大差がなかった。

「話を戻すわよ。幻想郷っていうのは『幻想』となったものが入る場所。入口はあるけど出口はない一方通行よ。入ってきたら二度と出られない。」

「……へえ。」

「……動じないのね。」

「動じてるよ。ただ分かったことがあるだけ。」

ああ、ここは死後の世界なんだな、と。

幻想となった、すなわち忘れられたとでも解釈しようか？

人間が忘れ去られると言うのはイコール死と同じ、と言っても過言ではない。

そんなところを死後の世界と呼んで、何がおかしいだろう。

「まあ、一応外に通じてる場所もあるのだけれど。そこに行けば帰してもらえるわよ。多分。」

「……まるで黄泉比良坂みたいだな。」

「……………なにそれ？」

「黄泉に通じてると言われてる道。ただの戯言だよ。」

アリスは困惑したようだったが、戯言に構う必要はない、と判断したのか、

「じゃあ、行きましようか。其の場所へ。」

と言って立ちあがる。

ずいぶん早急な判断であるし、それに迷惑をかけるわけにはいかない、と言うこと

「……………貴方、倒れたでしょう？」

と、一言言われた。

其の言葉に頷くと同時に、なるほどと納得。

あの森で倒れたのは外的要因があったからなのか、と。

「それに、幻想入りしたのは人間だけじゃない。忘れ去られた妖怪なんてのもいるのよ。」

「……………死なれたら後味が悪い、と？」
「そういうこと。」

なるほど、と理解した私は同じように立ちあがる。

すでに飲み終わった紅茶のカップとにも乗っていない御皿を上海が片付けたのを見てから、アリスはもう一体の人形を取り上げた。

先ほどの上海を陽と仮定するならば、陰、と言えるような人形だった。

なんだか睨まれてるような、そんな感覚。
可愛いのだが。

「ああ、こっちは蓬莱。」

「蓬莱、ね。」

視線に気づいていたのか、名前を覚えてくれた。

蓬莱と言うのは蓬莱山の蓬莱なのだろうか。となるとこの人形は神仙を象つたもの……………にしてはひどく陰鬱な表情をしているが。

見た目は、可愛いのだが。

「……………気にいった？」

「……………まあね。その影のかかった表情を見せるところなんて人形という人間の代替物であった恨み妬みを表していると思うよ。」

「……………。」
「まあ、素直に可愛いけれどもね。」

……………人形は持ち主に似る、というのが果たしてこの蓬莱はその通りだった。

今の『何を言っているんだこいつは』、というようなアリスの表情は、まさに今蓬莱が浮かべている表情そのものだった。

あ、そうとアリスは少々不貞腐れたように言うと、外に出た。それについて、私も外に出ると、同時に先ほどの眩暈が襲ってくる。またグラっとした体を、アリスは指で小突いてきた。

「……………おお。」

「単純な結界みたいなものね。この森は瘴気が出てるから、一般の人間には危険なの。」

「君は？」

「私は魔法使いだから。」

……………私にはその違いがわからなかったが、多分大きな違いがあるのだろう。

其の事に首を捻りながら、私とアリスは黄泉比良坂に向かうこととした。

よもや、そこが神社であろうとは、今の私は想像もしていなかったが。

一話目（後書き）

…内容に矛盾しかなかったが、大丈夫か？（あ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1845t/>

東方空気録 ~ Air Man

2011年10月9日02時42分発行